

天北原野 (下)

三浦綾子

朝日新聞社

天北原野（下）

昭和53年 9 月 5 日 第 1 刷印刷

定価270円

昭和53年 9 月20日 第 1 刷発行

著 者 三 浦 綾 子

発 行 者 朝日新聞社 藤 田 雄 三

発 行 所 朝日新聞社 東京 大阪 名古屋 北九州

印刷製本 凸版印刷株式会社

0193-260160-0042 ©AYAKO MIURA 1978

天北原野

(下)

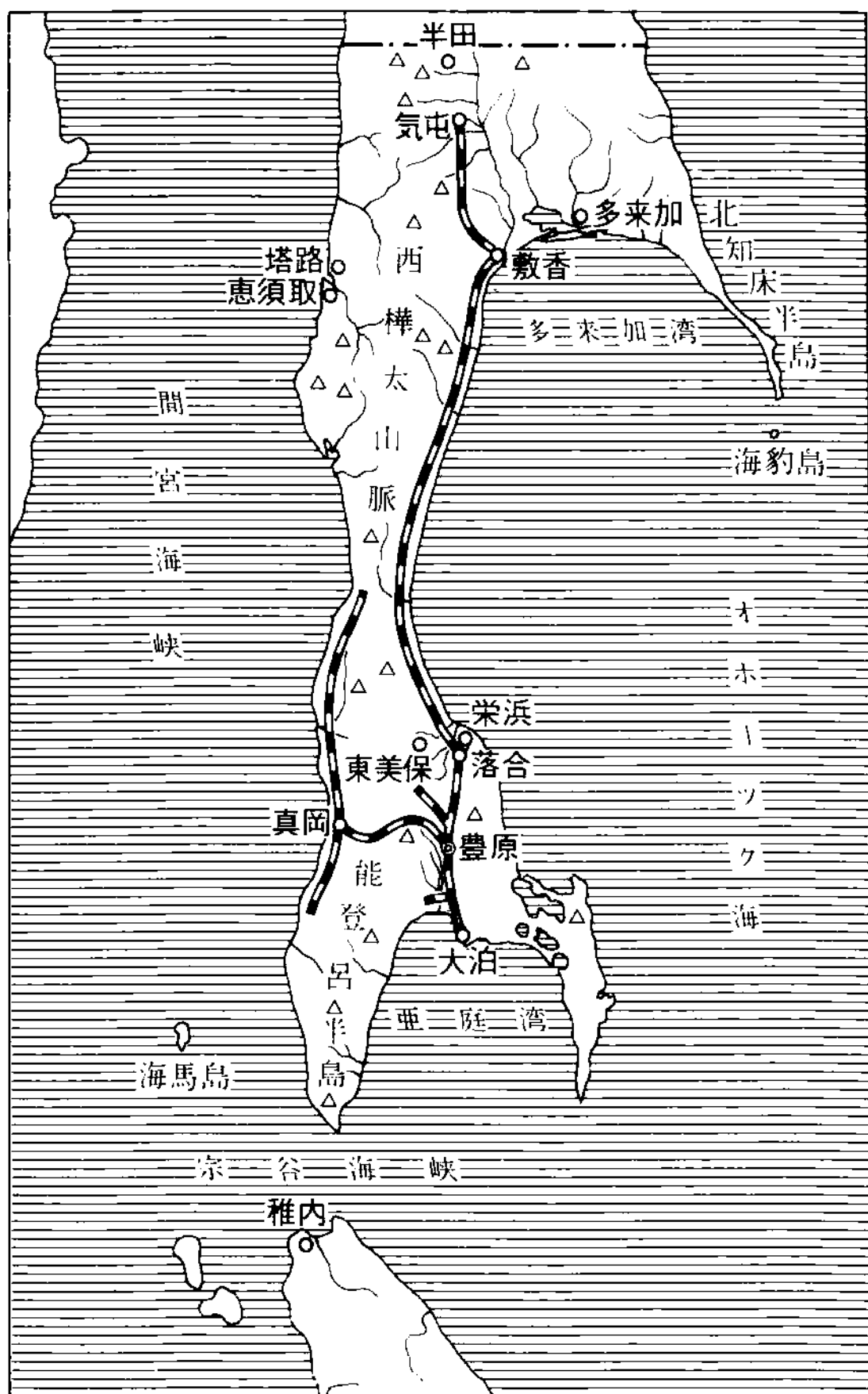
三 浦 綾 子

朝 日 新 聞 社

表紙・扉 伊藤 鑛治
地 図 吉沢 家久

天
北
原
野

(下)



犬の声

一

樺太神社からの帰り、あき子はナナカマドの実の赤く色づいた並木道を、ぶらぶらと歩いて行く。孝介が応召してから、もう半年になる。完治が征き、孝介が征き、年寄りと女子供だけの生活になったと、あき子は心もどなく思う。

白線三本の帽子をかぶって豊原中学生が四、五人、かたまつて歩いてくる。

「今日の教練には参ったな」

「マントクはきびしいからな」

すれちがい、生徒たちの会話が聞こえた。マントクとは、万年特務曹長の略だということ、加津夫からあき子も聞いている。あき子はふり返って微笑した。あの子たちが学校を出る頃には、戦争は終わっているのだろうか。それとも、あの子たちも戦争に行くのだろうか。午後の日がぐんぐん傾くのを身を感じながら、あき子は腕時計を見る。三時を過ぎている。

豊原高女の傍にさしかかると、ピアノの音が聞こえて来た。音楽部の生徒が弾いているらしい。

バイエルの八十番だと思ひながら、あき子はふっとイワンを思う。孝介の武運長久を祈つての歸りに、イワンを思い浮かべることは、ひどく不貞のような気がする。が、半ば、

（不貞だって、かまひはしない）

という気がどこにある。孝介が出征する時、貴乃は大泊まで送って行かなかった。伊之助と加津夫や弥江たちが大泊まで送って行ったのに、なぜ貴乃は行かなかったのかとあき子は思う。多分、離れて行く船を見送る辛さに耐えかねたのだらうと、あき子は勘ぐっている。豊原の駅に見送りに出た時、貴乃のまなざしは、現すまいとしても現れる悲しみに満ちていた。そしてそれを見つめる孝介の表情は、思ひ出すのも辛いほど、切ない慕情がみなぎっていたと、あき子は小石を軽く蹴った。小石は傍らの青い露草をふるわせて横に飛んだ。

「あき子叔母さん」

豊原高女と長官官邸の間の通りから、赤いさげかばんを手にした弥江が駆けて来た。

「あら、弥江ちゃん、もう歸るの」

貴乃によく似た弥江だが、あき子は弥江がかわいい。

「そう、今歸るの。どこへ行って来たの、叔母さん」

「神社よ」

「ああ、叔父さんのこと、お祈りして来たの？」

「そうよ、あんたのお父さんのこともお祈りして来たわ」

あき子は、完治の生還を心から祈っては来なかった。只型通り、兄の名を孝介の名のあとに付け加えて来たに過ぎない。完治のために、不幸な人生を送らされているような思いが、あき子の

胸の中にしこりとなっている。

「須田原さん、さいなら」

二、三人の女学生が二人を通り越して行く。その一人は金髪のロシア人だった。

「きれいな子ね。あのロシア人の娘」

「あの人、国語ができるのよ、候文なんかそれは上手なの」

赤い鞆をぶらぶら前後にふりながら弥江が言う。弥江は、いつのまにかあき子と何センチもちがわない丈の高さになっている。

「まあ候文が上手なの？」

と笑って、

「弥江ちゃんこの頃また、背が伸びたんじゃない？」

「うん。女学校に入ってから、四センチ伸びちゃった。入る時は一メートル四十七センチだったのに……」

ニコッと弥江は笑う。

「いいわねえ、弥江ちゃんたちは」

「何がいいの？」

「だって、何もかもこれからだもの」

「あら、叔母さんのほうがいいじゃないの。叔父さんのような素敵なお男性と結婚して、素敵なおうちに住んで、住みこみの人が手伝って、子供をおいて一人で出て歩けるし……」

「あら、そんなこと弥江ちゃん羨ましいの」

「羨ましいわ。第一ね、叔父さんみたいな人と結婚したら、わたしなら何の文句もないわ」

「弥江ちゃん、そんなに叔父さんが好き？」

「好きよ、大好き！」

涼しく見張った瞳が、一瞬キラリと光る。女の日だと、あき子は思わず、

「母子二代ね」

「母子二代？」

「けげんな弥江のまなざしに、

「ああ、母子じゃないわね、あたしと弥江ちゃんは。叔母姪二代」

と声高くあき子は笑う。

白樺御殿と呼ばれる樺太庁長官官邸の前だ。白樺が御影石の門から邸までの両側に四十本ほど立っている。

「弥江ちゃんには、きっと素敵な人が現れるわよ」

「叔父さんみたいな人が、この世にもう一人いるといいけれど……」

「……」

「叔父さんが兵隊に行っちゃったから、とっても淋しいわ」

ひっそりとした長官官邸の屋敷から、ひと声犬の吠える声がした。二人が声のほうを見ると、白いベンキをぬった洋風の窓をあけ、女が一人立っているのが見えた。

「長官は年に一カ月も、来るか来ないかだって？ 叔母さん」

「そうだってねえ。白樺御殿が勿体ないわねえ」

「本当ね、あの女の人、誰かしら」

「さあ、ちょっときれいな人ね」

片側は樺太庁だ。

やがて公会堂の傍まで来た時、

「あ、わたし、ノート一冊買って行くわ。叔母さん」

と、弥江が言う。文房具屋は公会堂のすぐ先だ。

「お金を持ってるの？」

「持ってるわ」

文房具屋の前まで来た。弥江だけ店に入った。外に待つあき子に日射しが寒い。文房具店には、中学生や女学生が何人か既に入っている。混んでいるので、弥江はすぐには出て来ない。と、オルガンの音が流れて来た。向かいの教会からである。さっき豊原高女の傍で聞いたピアノとはちがって、あふれるような、力のある音色だ。何という曲かわからないが、讚美歌らしい。あき子は耳を傾けながら、教会の尖塔に目をやる。十字架が光っている。あき子はじっとオルガンの音色に耳を傾ける。それは、今まであき子の知らなかった世界の音色である。美しいというより、清らかだった。清らかでありながら、胸に迫る何かがあった。かなりの弾き手であることが、あき子にもわかる。

（教会って、どんな人が行っているのかしら）

黒い板張りのエキゾチックな教会堂を見つめる。そこには自分と全くちがった人種が出入りしているような錯覚を覚える。

（ロシヤ人だろうか、弾いているのは）

またしてもイワンの顔が胸をかすめる。

ようやく弥江が出て来た。

「叔母さん、待たせてごめんね」

弥江は大人びた口調で言い、

「お母さんに、便箋も買って来た」

「お母さんに？」

「うちのお母さんってね、本を読んだり、ものを書いたりすること、大好きなの。仕事をきつと片づけてね、よく手紙を書くのよ、この頃」

「この頃？」

思わず、咎める声になる。が、それに気付いて、

「そんなにせっせと、弥江ちゃんのお父さんに慰問文を書くの？」

「どこに書いているのかわからないけど、きつと叔父さんにも書いていると思うわ。お父さんにだけじゃ、不公平なものね。それから、小樽のおじいちゃんや、おばあちゃんにも書いてるみたい」

「そう……」

「手紙を書かなきゃ、淋しいんだって」

「まあ、そうお母さんが言ったの」

「うん、一度ね。一度しか言わないけど、何だかお母さんもかわいそうだわ」

「……」

「だから叔母さん、今日ちょっとうちに寄ってよ」

「あたしが行っても、あんたのお母さん、やっぱり淋しいわ」

あき子はまた時計を見た。

二

「お母さん、あき子叔母さんよ」

弥江は玄関から貴乃を呼び、

「叔母さん、わたしちょっと宿題片づけてくるから、待っててね。帰っちゃ駄目よ」と、すぐに二階に上がって行った。

「あら、ちょうどよかった。よくいらしたわね、あきちゃん」

あき子が茶の間に入って行くと、台所で米を磨いでいたらしい貴乃が、前かけで手を拭きながら出て来た。

「まあ、ちょうどいいって、何かあったの」

貴乃は状差しから手紙を取り出す。

「誰から？」

尋ねるあき子には答えずに、貴乃が手紙を差し出した時、玄関に伊之助の声がした。ついと立つて、貴乃が迎えに出る。弥江も迎えに出る。

「おお、あき子か？　よく来たな」

立ったまま見おろして、伊之助はあき子に言う。その伊之助のうしろにまわって貴乃が、もう着更えの着物を持って立っている。背広を着物に更えて、

「あーあ」

と、伊之助は一つ二つ自分の肩を叩き、どっかとあぐらをかき、

「なんだ？　誰からの手紙だ」

と、あき子の手もとを見る。

「完治兄さんからの手紙よ。まだあたしも読んでいないのよ」

「何だ、これ軍事郵便じゃないじゃないか」

「あらほんとうね」

軍事郵便と押した判がない。普通の二重封筒だ。伊之助はげんそうに裏表を見ていたが、

「とにかく完治の字だ」

と、封筒から手紙を取り出そうとする。が、部厚い便箋は封筒一杯に入れてあって、中々出て来ない。背広をかたづけた貴乃がもどってくる。

「どれ、お父さん、あたし取るわ」

あき子の手を出す、

「いや、俺が出す」

と、渡そうとしない。それを見てあき子が貴乃に目くばせをして笑う。貴乃も微笑する。ようやく手紙を引っ張り出して、伊之助が老眼鏡をかける。貴乃も、あき子も、弥江も、その伊之助

を見つめている。

「何？ 病院に入ったと。何だ！ 東京の病院にいるじゃないか」

「あら、どうして、お父さん？」

あき子は伊之助の傍ににじりよって、完治の手紙をのぞきこむ。

「胸膜炎だによ、胸膜炎」

「胸膜炎ってなあに？」

「ほら、お前がやった肋膜炎、あれと同じだ。肺浸潤も肋膜炎、軍隊じゃみんな胸膜炎という話だな」

「お兄さんが胸膜炎？ 信じられないわ」

「うるさい、少し黙ってれ」

あき子はちよつと首をすくめ、伊之助と共に手紙を読んで行く。眉根にしわをよせて読んでいた伊之助は、

「ハハハ」

と声を立てて笑う。

「どうしたの、おじいちゃん？」

「うん、何、やっぱり完治だあ」

先に手紙を読んでいる貴乃は、黙って自分の膝を見つめている。

「ふん……む、なるほど、なるほど……」

うなずきながら、伊之助は読み、時折声を立てて笑う。とうとう七枚程の手紙を読み終わって、

「全く呆れた奴だあ。あいつにかかっちゃあ、軍医もうまく欺されらあ」

手紙をあき子に渡して、心地よげに伊之助は笑う。少し遅れて、あき子も読み終わり、

「呆れた、お兄さんって、相当なもんねえ」

と、やや手荒に手紙を折りたたみ、封筒に入れる。

「見上げた奴だよ。食いてえのを我慢して、食欲がないとひと月も嘘を言いつづけるのは、お前、こりゃあ大変なことだぞ。それに、肺病そっくりの空咳を聞なし、暇なしやって見せて……夜中まで咳をして見せたと書いてあるじゃねえか。こんな真似は、完治でなきゃできるこつてねえ。大抵の者は、食いたさに負けて、とてもじゃねえが三日とつづきゃしねえ」

「偉いかしら、そんなの。ね、おねえさん」

貴乃が黙ってあき子を見る。

「したら何かい、あき子。お前、完治がうまく胸膜炎になりすまして内地へ帰ったのが、おもしろくねえとでも言うのか」

「そりゃあ、おもしろくないわよ。正直に戦地で頑張ってる人は、どうなるのよ、お父さん。死んでしまうかも知れないのよ、その人たちは。お兄さんばかりが狡いこづかいことをして」

「なあに、何が狡いもんか。知恵があるんだ、知恵が。第一お前、完治のような男が一兵卒で働くよりは、銃後で造材に励むほうが、お国のためっちゅうもんだ。なあ、お貴乃」

「お兄さんもお兄さんなら、お父さんもお父さんね。全くこの親にしてこの子ありだわ」

呆れたように言い、再び封筒の中から手紙を取り出す。

「何とでも言え、完治さえ無事に帰ってくりゃあ、こんなめでてえこたあねえ」

「何だか、淋しくなるわ、ね、おねえさん。だけど、その軍医もまぬけねえ。レントゲン写真というものがあるでしょう。そりゃあ食欲がないって言って食べなけりゃ、痩せても来たかも知れないけど……」

「ほんとにねえ、レントゲン写真ねえ」

貴乃が言った時ぽんとあき子が手を叩き、

「あ、そうそう、思い出したわ。あたしが肋膜の時、レントゲンの技師が言ってたわ。レントゲン写真を正確に見れる医者は、十人のうち二人いればいいって」

あき子は自分の胸を愛撫したレントゲン技師の顔をちらと思ひ浮かべる。

「そうか、そんなもんか。なあるほど。完治の奴め、うまくやりやがった。この手紙にも書いてあるとおり、変な空咳ばかりつづけると、みんな気味悪がって傍によって来ないってえ話だな。何せ、肺病は伝染する。団体生活はできないってえわけだ」

伊之助はうれしげに言い、

「おっ、お貴乃、酒を一本つけねえか。祝いの酒だ」

「ハイ、只今」

すぐに立って行く貴乃を、見送るあき子の表情は複雑だ。あき子は手紙に目を戻し、黙って再び読んでいたが、銚子に酒を入れて茶の間に戻って来た貴乃に、

「ね、おねえさん、完治兄さんが軍医の前で、胸が痛い、背中が痛いって、言った顔どんな顔かしら」

「そうねえ」